

病と共に働ける社会に

提言

私は2017年1月、突然急性骨髄性白血病の宣告を受けた。金融機関から製造業の企業の管理職へと転職して3カ月余りしか経過していなかった。青天の霹靂だった。主治医から「治療しなければその年の桜を見ることはかなわない」と告げられ、続けて「もう一回、社会復帰できるように全力を尽くす」とも言われた。この言葉は、絶望の淵にあった私を救ってくれた。同時に治療に立ち向かう勇氣と希望を与えてくれた。しかし、待っていたのは壮絶な治療だった。無菌室で過ごした孤独な日々。隣室の患者が、朝にはいない。夜中に亡くなっていた。



がんサイバー ピアサポーター

しまとう つぐひろ
島藤 諭完

たのだ。次は自分に死の順番が回ってくるのではないか。寝ることすら恐怖だった。治療の痛みがあり、その年の5月、復職することができた。時は過ぎた。私は現在、経過観察で3カ月ごとに通院している。今年1月には、発病時に在籍していた西村工場(山形市)の代表取締役最高経営責任者(CEO)・最高財務責任者(CFO)の職を拝命した。当社は多くのお客さまに支えていただき、創業114年目を迎えられ、感謝の日々だ。金属製品製造業、設備業を主体とした当社にとって技術を受け継いだ社員は「財産」。私を含め、4人のがん経験者がいるが、みな就

業制限なく元気に働いてい

る。

山形市内で10月6日、NPO法人日本がんサイバーシ

ツプネットワークと当社が共催し、がんと仕事の両立支援セミナーを初めて開催した。経営者、労務担当者、医療従事者、がん治療の方など多方面から約100人に参加いただいた。私は当社の取り組み事例を紹介し、「特別なこと何もしないでいませぬ」と切り出しながらも、次の六つのポイントを伝えた。

1、社員とのコミュニケーションはより重要。

2、病気のことが、事故は経営トップの専断事項(社員の人生に関わることもなるの

でトップ自ら関与すべき)。

3、お互いさまの気持ちの醸成が大事。

4、何でも規定で縛りすぎない。

5、社員は「財産」。誰も失いたくない。

6、Employee(従業員) First(従業員 First)ではなくしてCustomer(お客さま) First(お客さま First)はありえない。

この六つは私が当社に入社し、病を得て、6年間社員と対話を重ねながら習得・実践したことに他ならない。厳しい社会情勢のもと、当社の経営も決して楽ではない。しかし、以前より働きやすい環境になったと社員一人一人が言ってくれ、自ら行動を変え、実践してくれている。私を支えてくれているのは社員一人一人である。ことを日々感じ、感謝とともに朝1時間工場を巡る。これが私の楽しみである。(山形市在住)

お互いさまの気持ちで ■ 仲間との縁で講座開催